へ13
3167
6

昭和九年九月二九日 購求

岩崎

八王

帝国図書館蔵

閑内詰雑司谷記行 下編

東都 十返舎一九著

勘定あつて綴の用紙

第五章

ざうしがやの鬼子母神。感応山法明寺とも。雑司谷ともいふ。

ふしぎ霊験あらたなり。

茶屋の掛

文政年中とある神殿茶屋あり入おくのもの足ざうしなり

うつ雲ひつけ。酒肴いろ〳〵。ひとり楽しむべし。その隣

へ 13
3167
6

うえとさう聞きつけて長。はあ人達いづまもいさまれの弱
き血気の手合。中あ田。かやうさのわきとらしきさ三人
あくとの中ゑ色間気とうとそうり（男衆いたコウの）
かげんあのまつし。久さ七さんとあはいがはでぬさあ
賞物さえりさ人作ぐうちとまさ恵さうしおちちの
中ふ。人さ人つけげあくくちやア。あくとのりのがつまう
わ人トりとひとうい（七八）さんさ。あまうのふとろあ武家。あのう
が二集とうさまを分さうのさんまうぐうう。松さうそのにも

アでさうし（松を）（十二）まを分ありやア大丈夫ぐ。ゴ多さ人との
さひあが。宿泊あ切身。あトで武家やトう酒ぐ二てうしでや。
三てうしぐうう書ぐあト。うえうつまとのがあいうの
うの奥侍どやア。百あ十ぐりあぐぐ多ぐうう武家うと
取ぐ。うぐしまてある。さづけ人せぐと。おりの主やうう
ある人。ソレあげやせう（七八）（ヲツトあり）やまく。ホンニそのあア
りうとあんぐうめあのを（松）（ウくりつて来。
こつ雅暮うあうと人トあ（コウあね）

さんぴようしでいつてそんな。どうぞくぶあやうでありけれ
のあねえ　又六「屁らがうめ。のあねえもきあゝいひも除けれ
松でも。なつてをりくやアがる。コリヤく手めえこちやア。いくら
いつても主持のきらめえ。さるなが出ると。そつちの方へおつ
なりぴんとつけておく。らちんよとさうしハアコリヤ黒鋼なな。
とのつんとまでもうめえやつよ　上八「コウそのさるなハなきてめえ
ぞ。おいらくるいなど　松「モレあぜききゑえ　七八「その黒鋼もえ
なれ。船頭の薫香とかさるなどシレ松の袖まえのあうに。

ちよいとまんなかへ出てある。棒のまうなあめがあがるよう。
船頭をころなそのうへで。あてんみをよまるそうべがあの下
のとまえ。この黒鋼が。そをなじくよつてくるとのさぐそれ
いころな。せんどうのひざのり松がりが。んくるのとぐアまさ
ねえく　又六「三そんきいちやア。にめんど。サア松とう。とりや
ぬのひとりで。おりのまえのうし　松「あんのうまつうこちア
ねえ。コとのちがひとりで。やくつしなのるのまるさコリヤう見
く　ト　さるなのそうをかへひとりむつてころべるるあ薫の　松「ヤアこまえなんど。
ちやうりくるのとあさやるながひとろうさに出ると

こゝのうちの事だが。ぶかりして こちらのそゝうにあつてゐろう
竹「ゑゝえらく。船頭(せんどう)がそのことで。尻(しり)をふつてのぞろう
それでその綱(つな)め。ひどり舩おりしいつぞよわらとのど
てきてわへく 松「てまへごとをぬりしやアがろう。松が
つらくあつて。せつうくらつしめてきたそんど。ゲエく
五六「へゝひとりで あんまり。がつく〳〵しやアがるうぐぐごちな
それその盃(さかずき)をさそ 松「いめへまでいやくつ中せうぱふ
おめへがさア ぞんざうそ様が唐(から)の大根(だいこん)めのぞんざい

七八「そのさちよびとちやづりのまくにおよう ト多く〳〵と女へんどあおがうこう
あそ七八「ヲヤごう世人に出ちこうまるの。モシ茶(ちや)づけを出(だ)しそん
る外に菜(さい)いゝうわへめしあがりでいゝよ 女「ハイ〳〵かしこまり
ましこト まだにわやりんしあるきあそさあと 五六「まあ茶(ちや)ものとこまゐ
ハエナント 安の勘定(かんぢやう)をいゝそうざらう 七八「ホンニうかくのんだ。
このさよつやどのことだ。音(おと)がしやア。こうわへでえ 竹「マア
おまちなさい。是(これ)がこうと。マアざうしと座敷(ざしき)をてつえとさ
雨(あめ)がふるのだ。どこのさけ。かさがのぢうさう。ぞを分

おやアおづうーのみち「こは且でうゝ。いうゝぐんホーうゝこうゝさ
のゞ。松（まつ）こうゝ多め人ゞゴうゝい 松「人（ひと）をつけホ さうゝちゞ十二
ゝうゝのゝ 竹「イヤゝゝゝねゝこゝゞあるあう。ゐんでゐ出る
ゞみのゝめを。めゝゞひゝうゝこ。ゝうゝさゞやアねゝう 松「十二
ゐ且ゞゐんゐホゝホゝめう。おいゝゝアせんどうのゝをゝう
さゞうりゞ 竹「アゝゝゝゞゐをゝアゝ。ゞうゝあゝを且ゝアゝ。ゞうゝゞうあう 松「
コウゐんでゐ且ゞゞうゝうゞうゞえ 七八「コレサゝゝゐづうホ三
松「イヤゝゝゞうホーうゐ犬（いぬ）のゝをゐいゝねゝゐおいゝうゐやアゐ 松（まつ）

ゞ形のゝをゞうゝ。ゝうせをおをゐやアゞうゝを。ゞうゝゞゝゝアゞ竹
ん丶ゝ形人ゞを 竹「コレやうゝうめゞ。ゝををゝゝん 松「ゝうゝ今ゝう
ゝ 竹「ゐうゝゝゝゐやアゞゞ且ゝ ゝ「コレサ めゝゝちやアゞゞんぶんの
ゝうゝいゝゐゝいゝゝゝゝゞゐゝゝゝ 松「ゝを且ゞゝうゝをあいゝゞ
ゝをゝをゝゝ人ゝうゝゝゝう。今（いま）ゝうゝゝゞうゝいゝゝんのゝう
ゞゝ。ゝうゝゝのゝうゐおやゝゝをのゐをゝかゞうゝをゐゐ。ゝうゝ
ゝアゝちゞうゝう人（ひと）をゐ平（ひら）ホゐおやアゐんゞ。あのゝ河（うし）ゞゝ人を
ゝう形（えんぐう）をゝうゝを畫（ゑゞ）ゐ。ひゐゝのゝちんゝうゝゞ。へゞ

[illegible]の松さんというちゃや。あるとき[illegible]
ざ竹「コノもうどんめゲト[illegible]
[illegible]七「[illegible]人さちゃア人の物で生[illegible]ふあるゆ[illegible]アゴうゴ。いけそう
ぐしい。人ゆきくるめざ。ゲ人ぶんのこうの[illegible]合ごりくおい
らゲもえびゴ。物ゆいいだおかサアくあうあとうおあつくと
ゆううゴ。一ぺんゲうとまゆ[illegible]さん七八「ちちゆあせ人。ちうーゲ
ゆううゴ。ゆの動[illegible]のうけゲあるうう。酒ゆちうう見ゆ人ゴ人
ゆうゆうゆうト[illegible]

[illegible]
ありうゆあるとあううゆ人くのゴゴたきゆうう七
お祝ひゆゆちうゴやちうゆ世[illegible]「十二おいえびゴ。きのどくな
ううちうくコンうをうー。うんゆるゆ酒ゆ青を。ゆをうゆゆ出ゴれ
ゴ。ううくくとのんゴきうゲ。ゴゴうーのことゴゲ代伸間ゴ。ゆ
ゲううを青ゆ分ゆをゆアゆ人うう。ゆの動[illegible]ゲうゆのと
おりのゆううゴ。今ゴ人ゆうゆ人ゆと。ゆ後[illegible]中のゴうゴ。ゆ
くきゆ人ゆお祝ひゴうゴゆアゆ。ゆ人うゆ人ゆ人ゆ[illegible]
トいゆとうゆひゆんゆのおゆきゆのゴゆあうゴ
ゴゴゆゆゆゴゴうゆゴゴうゴゴ[illegible]「イヤゆきゴうゴひゴゴうゴゴゴゴゴ

ぶんまをかぢぢ。こくさんでござります。「十二もんぢことを
りんまをかのうんが出るぞらう。「イヤ。おつりぢまつりをまう。
出動室をおきるまさうと。四ろうド市世。七八「そんなもんぢ
ちぢ。「イヤ。くぐりもんぢのうぢ。稼人。り。まを分ぢあまつを
ら。まを物をまをまをまを。やろうぢ。そんうまをいらく見
「イヤまちぢひいどぢり。ませぬ。七八「ナントそんをけぢ。りん
ちつとのまをまをのつぢ。ひとをうしまぢ。のんでゆよろうう
ぢんぢ。「こで今まぢ四酒。いらわどあぢりまを。七八「イヤ。

てしぢりのんぢりう。「もんあるこあるこあるまを。「ふ
うの。まをまをみあの。「イまをまをと。おぢ合中まを。「ヨリヤまを
ちぢ。出動室をまをまをまを。「下く
二朱と兵百六十文。「出ろうしまを。「これぢまをこいをとついと。
こく。女中。のちつと酒ぢ。「サ。豆ぢのいとづ
り。「ぢをわまをぢわ。ひつりの。鮫の。約束ぢまを。あと
のひとをしひのぢ。まをまを人やろうト。
ぢ。「まをいうぢ。豆ぢいりぢ。「イく。豆ぢいりぢ

花の美のみん
上野イセ屋文九
御酒呑

さうおござりますト いふところへ七八十 一ツかめ人さんござらしやれし。あの娘が あるし。旅りのかづらひがあるのかり。りよがくまう一文づゝで。 ござりますなどゝ茶をのむことがあるねへ「さうですねへ サア出かけやせうト。あくらで田楽を食 いわとのしるべを出る

第六章

猫に鰹武士の倹約
洞のうち中間の愁

さても左京太夫護国寺の霊門より 入て今をさかりの花の月(?)に。菜阪田楽の茶や新

とある茶店。縁台を招く。腰掛の風にひらひらする女の 顔ぐちの女がかけが「おはいりなさい お休みなさい 御酒 もおさかなもござります。お休みなさい「うまいもの 前に見ひがある。ちよつと休んでいくべいト 此の物はちやうど人せいの多きものにて。酒と肴にてひるめしになるところへ 先だつてすこしの ところへ中間のお侍さまもあそのふたりの小さでに。ねがいとおもいめんのあたま もありましておゝいに云ふてよいさまとわたしの方へおきやくでごさいかさくらや あかいの方がいゝよ 侍「コリヤ角助少し休息いたさうト 茶やの女 おらいなさいと女出る 女「 おもしろいものでございますどうぞおかけなさいまし。 ござんせよりあさりますか。あの 侍「イヤそこでよいト 休息をいたす 女「なんぞあげませうか 侍「何ぞあるか 女「ハイござ

うなぎハ蛸のさくら煮。黄蘗のかまぼこ。からしみの出来ます

す 竹「今夕の肴ハなにがなにかござ 女「イヱあなたもうござ

ります。其かハりにちとよろしうござります 竹「イヤ身どもハ

なれど精進をいたしてをりまするゆゑ。なまぐさをやめて豆腐ハよし

ござる 女「さやうでござりますか 竹「それならその田楽でござる

しく夜ハ酒の肴によいのじや。其外ハ夕がたりやく

出てくるものじや。コリヤ身どもハ豆腐をいつて好物ぢや

ら。追々申付る。あまりこげぬやうに。味噌もかくなる

ますがのさして。まづ十本ばかりやいて出さしやれ 女「ハイかしこ

まりました 竹「コリヤ角助。子供衆もあるものぢや。それ人あげてお

しやれ ナント今宵出かけて女の目元のでかい女郎のさと

かづら物語の内侍に。よく似ておるではないか 角「ハイ

そうでござります。弱之丈の狆に似てをります 竹「玉狆

とハ解せぬの 角「イヤコレ私が目をこぼしており

ました 竹「今のハ合点解せぬ ト 此間女郎ならびにやいで

豆腐ハあつくよいさけぢや。コリヤ角助。ひとつのむか 角「ハイく

そもさいかがでござりまする　仕「イヤ〳〵そもさいの酒とのおと。
殺不さるいうてよしやまし〳〵　角「ハイそもさん　仕「なるほど。
一さいや二さいのひとりぐらいの事あるうぶよいうてと殺中
の虫と。さんざまるまうあめざ　角「イエりやくさいてまこと
のものいさいでありまする　仕「イヤサそもさを幸抱しうもの
ありうの武士のそもさまざ。今お接待武へよるとあるとと
でいちまうぶまるうこと。そのとおもとのあさ　角「ハイそれいあり
がとうどざりまする　仕「イヤとうで礼のあるおとどのゾンく

そのあとをあるそもさまうもさくゾンをくれめがてこれ
そもさまうこと。このそもさまるのぶうこさいさまさまあの大ぶ
く。コリヤそもさいさざめて。やどでそもさいさまこと。兼定あらう
ぶ　角「イエまざ。そもさんかまいりまさ　仕「そもさいまさまさまさ
のこと。そもさまいさまさまさまんがうしう。遠屋ぶあるうこと
そもさまさまやまさ　角「ハイ〳〵ト　そもさのこのぶうこの大ぶ　角「そもさいまさ
りやぶまさまさ。モシはあんまさいの大をひとつおうりやまさまさト　表
のまさぶあるこさどざんを　表「サアくこさんみかさいこさおこさ　仕「ひとつぶ

淋しいに無様なひとつ。あれをしてくれなさいト
ふるりのそなるを 角「ほんにどうぞどうりまする 夜「おめへと一所に
おつしらせうけて
みと見ておしなせへト ちやわんをおやまへ 角「ヲトヽヽと見えに ちやうだ
どうりにそ 夜「おめへもたつ。ひとつうけるなせへ 角「ハイ
ハイく酒ちとめしうりをとそでどうりまするぷまづむとつゐると
あんのこゝろおのひまなせぬ。コリヤつれぞみ。ひとつうけなせ
せう 夜「サアくひとつうけうく。ありがてうおめへやうつ
あせへト はうちおせへみひとつてのせ 角「ア 悉くのちゞ上一杯なさ
さあげで随分おうみ酸まうと。コリヤ 大きな盃でのいいれ
あいが。あをとおどぶる。コレぢのどんなそ。あすんおうでね
しだうりのんで。コレぢのコンなそでだつう。ホンニ あるくのまへ
ぢう人のうまそよみ。舌をとして呑であるのを。そさおさつ
とんでおつさ。コレのあくのうち。マアどの言うみおうつ
とおりひなさる。あまりとりえ情なへ。むどいどんなでなな
くうくヽヽやしくてく ト
上戸がおよびなさるどうみ 角「工 あのあなヾつあへ。え

うんがくの師の種ぞのぞ。そはそのひとうえ。おもへさまを。
どのうーのうまう。馬の骨うんびもも〜ぞのおうぞ。この
ほうのまもせ。ぞこるこのうち。まこのく。あるぞうえん
くいうそのことがこがはまもうと。このとをうえのおもとのこ
ゆ「ヤイく角もけく」「そはこくぞんがおよびおこう
てどよ角「ハイくこぞ今をそえ。酔さく「かくをけよをも
い。そう和のあんをあくぞ角「あんをとのぞんのさぞ。これが
あうぞふのこはまもうう。去年の秋。おうこはるこうと
おぶうさまぞ。うらをえんさえやうと。おちのくというそ
おれ深のさ川て。ぞこえおいをあさるのも。うちが
おぶのうのーてあうこまもくぞ。いうそはこはもあい。
彼岸の中日。こうおちこがこのちを。めく
あぞうて。そはこぞ胴のぶぞうちり法まうて。おうひ
がけもあのは強。そのこのうちが悲くさ。
えやくくて「ヤイく。そはをあの今とのう
て。あくこぞ。あうのぞ角「イヤそのこと。おくこあの

あつまるあるを仮「ヤヤ」くことけものめづのようい
く角「イヤあるさもあいとあつまるまんぐ。
つちいたんあるあるぐがとぐまて仮「ヲ外笑」のと
ういやつぐ。サアく あのつめを。あとぐと。ふんどくの
さぐりて ふきおう。アときあいやつぐ角「ヲヤふんあ。
つちの手ぬぐひうとおりひきて。左理をかく
ぐひあ。金玉ぐあるまるとぐんどきく。ぐどいやつぐ
玄華の波巻あ。仏ふくかちとさんとまを。おがう

さんぐめく あぐ川さ あぐうく仮「ヲぐちをぬうま。
十二 ぐうあぐさんさまとくあつ。むさいとをぬう
くおう角「イエ あぐつさまぐとそ。その金玉ぐ明の
さまくん体えて。尾のちくんぐくさぐ川とあぐうく。
そとて変宝体生とと。おさまとのでぐちくまくう
仮「ヲ仏をぬうを。サアくいうあ。さまうく松尾氏
へあつけて。月出さの酒のちくうあ あとくく
さやさまくト あのちくんとして出て。左手をあ あつ
つぐのて出ちけ。さまてつり彩をあへちくん

と。文藻ちうとを[illegible]紀行新春の吉日板とのうつおくのこと

雑司ヶ谷記行下冊終

雑司ヶ谷紀行後序

堀社同宿を。頼同社頼[illegible]

深川の膳奉祝にが来。此あり。[illegible]れと閲

吉新。[illegible]経と嘱る反古紙に事。

[illegible]よりよ。[illegible]の[illegible]道大

学[illegible]。性喜社[illegible]流一の[illegible]。

今や其編編雑司ヶ谷紀行の[illegible]。

手[illegible]後序[illegible]押奉[illegible]。[illegible]

性あ[illegible]。[illegible]利酒の恵投[illegible]。

おんなことひさしくや[illegible]

東寧舎識

雑司ヶ谷 護国寺 王子紀行 全部三冊

梅亭金鵞作

此書ハ初代十返舎一九書著べきのところ故人となりしゆゑ
遠へて稲荷の名を拾ひ閻魔の帳にも記せし
男女の浪花家の内容をとりとめ年久しく大縁のはじめなり
其外さまざまの事ども書つらねて又をかしき人物をまじへ
ありのまゝの滑稽笑話なれば見る人よろこぶべき一の趣向
四方の人々のよろこびをうけんことを茶のみの話のたね
はなはだ多かれ全部揃上仕

板元敬白

妙竹林話 七偏人 全部五編揃

梅亭金鵞著

梅迺本鶯斎画

此書ハ七人の粋客等が日頃洒落をつくしての戯を行く種々の滑稽奇談
かず集めてさまざまの趣向をこらし百物語の怪談
おかしき事共を綴りて笑ふべき話ども
ゆらんの御評判を希ふ

朧月花の栞 全部五編揃

松亭金水著

梅迺本鶯斎画

東都書肆

中橋下槙町

宝集堂板